

# 紋章上絵師

福田昭三

着物を漂と引き締める家紋。わずか数センチの円の中に描かれた精緻な紋が、日本の伝統を伝える。



ふくだ しょうぞう ●  
1943年生まれ。全国紋章連合会副理事、東京紋章上絵師組合名誉会長、全国染色補正工業連合会副理事。  
東京都中央区日本橋浜町 2-49-3



福田さんが考案した「ぼかし紋」。鮮やかなグラデーションがさりげなく装いを引き立てる。実演と解説で各地を回って以降、着物産業の本場・京都からも多くの弟子入り志願者が訪れた

上/型紙を見ると、わずか数cmの縁の中に複雑な模様が描かれているのが分かる。これを見ずに描けるようになることが修業の第一歩だ 下/福田さんが手がけた天皇家・秋篠宮家の紋章



## 偉大な師の背中を 追い続けて

壁一面を覆う棚に隙間なく並ぶファイルを開くと、これまでに染め抜いた家紋の型紙が次々と現れる。この一室だけで数千枚はあるだろう。日本に約六千種類あるといわれる家紋を着物に描き込む紋章上絵師の世界で、福田昭三さんは天皇家の紋も手掛ける希有な存在だ。「この道に入ったのはね、中学の時の担任の先生のおかげなんです。絵が好きだった僕に、放課後、美術部顧問もしていた先生が毎日課題をくれた。そして、『お前がそこまで絵が好きなら』と、東京で染色店をやっている親戚を紹介してくれたんです」。福田茂、師匠であり、後に義理の父になる人だった。



仕事道具の一部。ぶんまわし(コンパス)は自作したもの

## 祖母の言葉に 奮起した若き日 画期的な技法を考案

郷里の山形から十五歳で上京、弟子入り。便箋に家紋を描く練習をしながら、お客の元に仕上がった着物を届け、また新たな仕事をもらってくる。やはり筆を握っている時は楽しくて仕方なかったという。ただ、辛かったこともある。「今時、紋なんて時代遅れで流行らないと思っていたら、寝る暇もないほど忙しかった。親方は深夜三時頃まで仕事をしてくれるから、僕もその後ろで練習を続ける。ようやく寝られたと思ったら、今度は六時に起きて、

親方が起きる前にその日の仕事の支度を整えておかなきゃいけない。忙しくて、食事一日二食。食べ盛りでしたから、それが一番堪えました。さすがに心が折れて、郷里の祖母に『迎えに来てくれ』って手紙を出したんです」

ある朝、自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。夜行列車に飛び乗って駆けつけた祖母・志ゆんさんだった。「喜んで仕事部屋から走って行ったら、そのまま中までどんどん上がってきてね。いきなり親方の前で『昭三、お前何くだらないこと言ってるだ！頑張り！』って、そのまま帰っちゃったんですよ。親方は私を一言も叱りませんでしたね。『頑張りなんだな』って、それだけ。それが今でも忘れられませんね」

五年の辛抱の末、ようやく仕事

を任せられるようになった福田さん。茂さんが四八歳で亡くなるまで、共に過ごせたのは十数年だった。「親方は誰よりも腕の良い職人でした。歌舞伎界の定紋も、腕がそこまでの職人は細かな部分を端折っちゃう。お客さんには分からなくても、我々にはひと目で分かるんですね。親方は『定紋だから絶対に崩しちゃいけない』と寸分違わず描き上げていましたね」

色鮮やかなグラデーションで紋を描く「ぼかし紋」は、福田さんが独自に編み出した技法だ。不可能といわれた油性マジックの染み抜き法も考案。どちらも惜しげもなく同業者に伝えてきた。「僕の今の夢は、家紋という伝統とこの仕事がこの先も続いていくこと。まだまだ頑張ります」と福田さんは微笑む。